婦人宣教師、ミセス・プライシの
「おばあちゃんの手紙」(12)

～アメリカン・ミッション・ホームの
創立者の一人～

小林　恵子

二八、

片瀬　一八七五年八月二日

愛する子どもたちへ

朝からの雨ふりで、子どもたちは狭い家のなかに閉じこめられ、私のまわりを休みなく動きまわって遊ぶものですから、そのそばで手紙を書くのは容易なことではありません。でも、私たちのホームの仕事とここの子どもたちにとても関心をもって下さっているアメリカの皆さんたちに少しおしゃべりがしたくて手紙を書くことにしました。

私が皆さんたちにお話ししたいのは、ホームの子どもたちの幾人かが夏休みをどう過ごしたか…費用があまりかからずゆっくりと夏休みを楽しむために私たちがどんな事をしたかということです。

私たちのホームのなかで九人の子どもたちは夏休みの間も帰る家がなくて可哀そうなので、この子たちのために私たちで何かしてやれることはないかといろいろ考えてみました。相談のあげく、どこか美

しい空気と景色を見て気晴らしの出来る田舎へ連れて行こうという結論になったのです。でも、それは私にとってかなり難しいことだったのです。何故かというと皆さんたちにもおわかりのように私は日本語がまったく話せないし田舎の人々は英語が理解できないからです。それに、この子どもたちの何人かは英語が話せないし理解できないのです。けれども父なる神は私たちが子どもたちに楽しみを与えるため何か良いことをしようとするときには必ず助けて下さると私は信じていました。故国アメリカから日本に来て以来、神はいろいろな方法で驚くほど私たちを助けて下さっているのです。ですから私の心はいつも神への賛美で一杯です。そして、他の人々を幸せにしようとして働くとき私は自分が神から一番たくさんの祝福を頂いていることが判るのです。

さて、私たちが借りた日本の民家は海岸にあって丁度向かい側に海の水が打ち寄せる長い砂浜が続き、江ノ島という神聖な島につながっています。こは外国人にとっても夏の行楽地として有名な場所なのです。また、この島には多くの神社があって、そこにお参りする巡礼の人々が大勢やって来て賑わうのです。島のなかに有名な洞窟があって、そのなかに数えることの出来ないほど多くの神像があり、それを拝むために人々がやって来るのです。このように人が大勢集まる場所に行くのは私たちにとって望ましい事ではないのですが、私たちのいるこの小さい村は海辺にあって皆が楽しめますし、行きたい時はいつでも島の方へ歩いて行けるのです。私たちの泊まっている素敵で小さな民家を絵にかいて送ってあげられるといいのですけれどね。外から見ると壁はペンキが塗ってなくて黒い板だし、屋根は重いわらぶきであまり綺麗に見えないのですけれど、私たちの住んでいる家のなかはみんな新しくて清潔でとても工夫されてつくられているのです。床の畳や白い紙のふすまなど素敵です。ふすまは好きなように動かす事ができ、思いのままに部屋を大きくも小

さくもすることが出来ます。私たちの家は母屋と別棟に建っていて、部屋のまわりに小さな縁側がついています。この縁側と部屋のなかのマットの上は靴をはいたまま歩くことができます。私は子どもたちが家のなかを裸足で歩きまわるのがどんなに楽しいことか、しみじみと判りました。暑い気候の地方に住む子どもたちはみんなそうなのでしょうかね。この小さな子どもたちはホームに来る前には自分たちの家でいつも裸足で走りまわり畳の上で眠っていたのですからそうすることが嬉しくてたまらないらしいのです。それは確かにこういう暑い気候の間は結構なことだと思います。でも、私たちのホームに帰ったときにはどうでしょうかね。私たちはこの子どもたちに知性あふれた淑女に育って貰いたいし、西欧諸国の婦人たちのように文化的な生活をするよう人々を指導して欲しいと思っているのです。

昨日、私たちは一そうのボートを借りて江ノ島へ出かけました。この島は巨大な岩が恐ろしい地震か何かによって海のなかから外へ突き上げられたような格好をしています。その側面はぎざぎざで恐ろしい形をしていて、底の方におりていくと数えきれないほどの小さな洞窟があります。私たちはこれらの洞窟の一つの中へ入っていこうとしましたが潮の満干と流れでとても危険で行けませんでした。また、大きな洞窟の一つで、なかに沢山の像が祭ってあるのを見ようとしましたが、大勢の人々がその見事な洞窟を見ようとして混雑しているので小さな子どもたちには危険だと思って中に入るのを止めることにしました。子どもたちも私の意見に従ってくれました。

ある日、私たちは一そうのボートを借り海岸に沿って三マイルほどいったところにある鎌倉の大仏を見に行きました。この大仏は世界で最も大きくて古い仏像で日本へ来る外国人の誰もが行って見たいと思っているものなのです。ですから、この子どもたちもこの小さな田舎の村に来たおかげで素晴らし

く立派な興味ぶかいものを見ることができたというわけです。子どもたちは毎日、海辺に駆けて行って広い広い太平洋から打ちよせる波に大喜びして海水浴を楽しみました。海水浴は子どもたちにとって本当に面白くて楽しいことですから、着物を着たり脱いだりする更衣場がなくて便利が悪いことなど気にするようすもなく楽しんでいます。でも、私にとって更衣場のないのは困ったことで、人力車のそばで日傘をかざしてテントをつくり、そこを更衣場にしました。その人力車は二人の小さい子どもとみんなの海水着を運ぶために頼んだのです。なぜかというと、海岸の砂は足が深くすくわれるので大きい子どもたちは何とか歩いて海岸ぞいに続く砂丘を越えることができるのですが小さい子どもたちには無理だったのです。

この家の持ち主の母屋のお爺さんは大の子ども好きでいつも私たちと一緒に海に行って小さい子どもたちの世話をしてくれています。この老人が子どもたちに囲まれてとても幸せそうにしているのを見ると、この子どもたちにとってだけでなく、この老人にとっても私たちの滞在が彼の生活に楽しいひとときをもたらしているのではないかと思いました。何日か前、彼は竹で何本かの釣竿を作ってくれ、子どもたちみんなを魚つりに連れて行ってくれました。

賢い年寄りの釣り師によくあることですが魚はあまり釣れなかったようです。でも、子どもたちは籠の中に魚が一杯入っているかのように大喜びで帰ってきました。

あなたたちが聞いたらきっと喜んでくれると思いますが私たちの子どもたちはこの村の人たちに歌を歌って聞かせたのですよ。私は子どもたちにここでの小さな宣教にそれが一番良いやり方だと話しました。子どもたちは日本語に訳されている大好きな讃美歌を幾つか歌いました。

「I am so glad that our Father in Heaven」

（註1）「I am Jesus Little Lamb」など、聖書物語にでてくる私たちがよく知っている讃美歌です。私はここの人たちが理解できる日本語で子どもたちが歌うのを聞きながら胸が一杯になり、心のなかでそっと祈りました。〝この異国の地にこのようにして幾つかの種が蒔かれ、根をおろし、神の栄光のため幾つかの実を結びますように〟と。

あと二日のちに私たちはホームに帰り、夏休みの残りの日を過ごしますが子どもたちにとってこの村での生活はとても楽しくて皆が大変元気になったと思っています。

それから、この子どもたちが歌を歌うのを聞いたり、毎朝、毎晩ひざまずいて神に祈る姿を見た人たちがそれに心をとめ、私たちのホームとそこで教えている宗教についてもっと知りたいと思うようになるようにあなたたちにも祈ってほしいのです。なぜならこのようにして日本の国の隅々まで神の祝福が注がれることが私たちの願いなのですから。

いつまでも、あなたたちの愛するお友だち

メアリー・プライン

＊

二九、

横浜　一八七五年八月二九日

故郷の可愛い孫たちへ

私は今、あなたたちに日本からの最後の手紙を書いています。私はあなたたちに会いたいとどんなにか思いこがれてきましたし、故郷の懐かしい我が家に再び戻れるかと思うと喜びで胸が一杯になるのですが、私にとってこの大切なホームを去ることは本当につらくて最後の決心をするまでには身を切るような苦しみをしました。

あなたたちは私の健康がすぐれないことをもう聞いている事と思います。私の身体の具合があまり長いこと良くならないのでどこか違う気候のよい所へ転地したほうがよいという事でここを離れる決心をしたのです。これも主の思し召しだと思いそうすることにきめました。

私はもう二度と日本からあなたたちに手紙を書くことはできません。でも、私があなたたちにこの国のことや私たちのホームと学校のことについて書いたことを心におぼえ、日本での働きに関心をもち続けてほしいのです。

おばあちゃんがこの可愛い子どもたちのいるホームを去ったからといってあなたたちまでがこの子どもたちの事を忘れてしまったり、この子たちの教育のために皆がしてあげられる援助をやめるなんてことはしないで下さいね。

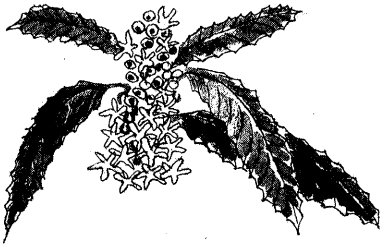
このホームも学校も今ではまずまずのところまでこぎつけました。そして、神さまはここで私たちの仕事をすべて大変すばらしく祝福し助けて下さいました。でも、この仕事はずっと続けていくべきですし、年ごとにますます大きく成長し、より人の役にたつ学校に育っていく為にアメリカのお友だちのみんなに援助をずっと続けていってほしいのです。

私はあなたたちがこれからも日本を愛し何か自分たちで出来ることに手をさしのべて下さることを願っています。

今、私は愛する孫への「おばあちゃんの手紙」を終わるにあたってM・G・ブライナード女史に頼ん

で書いていただいた美しい詩をここに載せます。どうぞ、あなたたちみんながこの詩の心を心として成長して下さいね。

あなたたちの愛する　おばあちゃん



「おばあちゃんの手紙」の二八は、夏休みに帰る家のない子どもたちを楽しませようと、横浜から近い片瀬・江ノ島の海岸で日本の民家を借りて過ごした幾日かの記事である。当時の江ノ島は洞窟のある神社の島として賑わったようであるが、片瀬の海岸は小さな漁村で海水浴を楽しむ人々はまだ少なかったと思われる。子どもたちは毎日、泳いだり釣りにいったり、鎌倉の大仏を見にいくなど本当に楽しい夏休みを過ごしたようである。日本家屋で靴をはいて歩くプラインの姿を思い浮かべると滑稽でもあり、子どもたちが裸足で喜んで家のなかを走りまわる姿も楽しい。

八月二九日に書かれた日本からの最後の手紙は病気の為に帰国せざるをえなくなったプラインの悲しみを伴う短い文面である。これまで病気のことが書かれてなかっただけに驚かされ、心の痛む手紙である。プラインは自分がホームを去っても今までと同じようにこの仕事の援助を続けてほしいと孫たちに頼んでいるが、日本を愛する気持ちが手紙に溢れている。最後のブライナード女史

の詩は割愛したが、羊飼いに守られる私たち小羊について書いた宗教的な美しい詩である。

彼女が日本から故郷のニューヨーク・アルバニーの孫や日曜学校、職業学校の先生や生徒に送った二九通の手紙は後に孫の手によって「Grandma's Letters from Japan」「おばあちゃんの手紙」として一八七六年、ボストンから日曜学校の子どもたちを対象として出版された。同書は横浜開港資料館に保存されている。

著書のミセス・プラインがミセス・ピアソン、ミス・クロスビーと共に米国婦人一致外国伝道協会から派遣された婦人宣教師として横浜に着いたのは一八七一（明治四）年六月のことであった。それは彼女にとっては晩年に近い五一歳のことである。混血児の救済と女子教育を目的として来日したもので、その年の八月二八日には山手四八番館にミッション・ホーム（亞米利加婦人教授所）を設立し、混血児の養育と女子教育を開始した。それから四年のちの一八七五（明治八）年十月、ピアソンは惜しくも病気のために帰米した。

彼女はホームの子どもたちや女子生徒にとってだけでなく同僚や使用人たちにとっても精神的母親であり、太陽のような存在であった。また、総理として学校の将来をよく見通し、ピアソンやクロスビーの持ち味を充分に発揮させ全員をよく統率した人であった。包容力のある温かい人柄は〝おばあちゃん〟として慕われ愛されたが、それだけに彼女の帰国がどんなにホームの人々を悲しませたか、しばらくの間はその空虚さに呆然としていたとある。（註2）植村正久は「臈（ろう）長けて威儀犯すべからざる顔に慈愛を堪へたるプライン女史」と回想している（註3）

プラインは帰国後、病癒えて再び婦人宣教師として中国の上海で奉仕したが、一八八五年二月一〇日、故郷のアルバニーで亡くなった。六四歳であった。

ところで、このホームから日本の幼児教育の黎明期に活躍した人々を多数輩出したことは大変興味ぶかい。これについては既に（4）で述べたのであるが、プラインたちの献身的な姿に心うたれホームの募集広告を書いた

のは中村正直であった。彼は後に東京女子師範学校摂理として附属幼稚園（現・お茶の水女子大学附属幼稚園）を設立し日本の女子教育、幼児教育の黎明期に大きな貢献した人である。また、これら婦人宣教師に接した僧侶、関信三（安藤劉太郎）が同師範学校附属幼稚園の初代園長として活躍したことも興味ぶかい。

また、卒業生のなかには日本で最初の私立幼稚園、桜井女学校附属幼稚園を設立した桜井ちかがあり、児童福祉事業の先駆者で相沢託児所ほかを設立した二宮わか、医学を学び後に頌栄幼稚園の園長となった西田けい、東京女子師範学校附属幼稚園の保育の実況を描いた女流画家、武村耕靄など、幼児教育の草分けとして活躍した人々が輩出した。さらにこのホームで働いた婦人宣教師たちのなかには日本で最初の私立の保育者養成課程を桜井女学校に設立したミセス・ツルーなどがある。こうした人々が輩出したのは、婦人宣教師たちのホームでの働きや心意気が接する人々に大きな感化を与え、これが日本の女子教育、幼児教育への草分けに繋がったと考える。

「おばあちゃんの手紙」を読み終わって私はピアソンが時代や人種を越え、とても身近な〝おばあちゃん〟として親しく感じられてならない。善意と親切、ユーモア

◀ 混血児に囲まれたブライン

と楽しさ、そして何をも恐れぬ信仰をもつミセス・ピアソンの姿が手紙を通して生き生きと伝わってくるようであった。混血児を自分の子のように愛したプラインの姿をこの写真からもかいま見ることができるであろう。

混血児の教育は明治二四年九月まで二十年間つづけられ廃止された。（註4）そして、このホームは横浜共立女学校（現・横浜共立学園）として女子教育機関として現在へと発展していったのである。

明治初期の混乱期に日本の行政から全く放置され、社会の恥として人々から蔑まれていた混血児たちを慈しみ養育して一人の女性として教育したこのホームの婦人宣教師たちの功績は特筆すべきである。人権問題が高くうたいあげられる今日、混血児の教育問題は過去のことではなく現在の日本および世界がかかえている問題である。

「おばあちゃんの手紙」はキリスト教伝道の色彩が強く、抵抗を感じた読者もあったと思われる。明治初期に宣教師として来日し、日本の文化や伝統をよく知らないミセス・プラインの手紙はその時代を配慮したうえで読んで頂きたいと思う。

終わりにあたって邦訳のご指導を頂いた友人の平あい子、ミス・スピーチリィーに心から感謝し、またお世話になった横浜開港資料館、ならびに横浜共立学園にお礼を申しあげたい。

（国立音楽大学）

（註1）I am so glad that our Father…　聖歌65番「神のお子のイェスさま」日本福音連盟聖歌編集委員会　いのちのことば社

（註2）「横浜共立学園120年の歩み」横浜共立学園　一九九一年　五八頁

（註3）同右　五七頁

（註4）同右　八五頁

※　このシリーズは今回で終わります。二年間にわたりご愛読ありがとうございました。

（編集部）